明治四十二年一月五日　（毎月二回）　世界婦人　（明治三十九年十一月七日第三種郵便物認可）　第三十二號　（一）

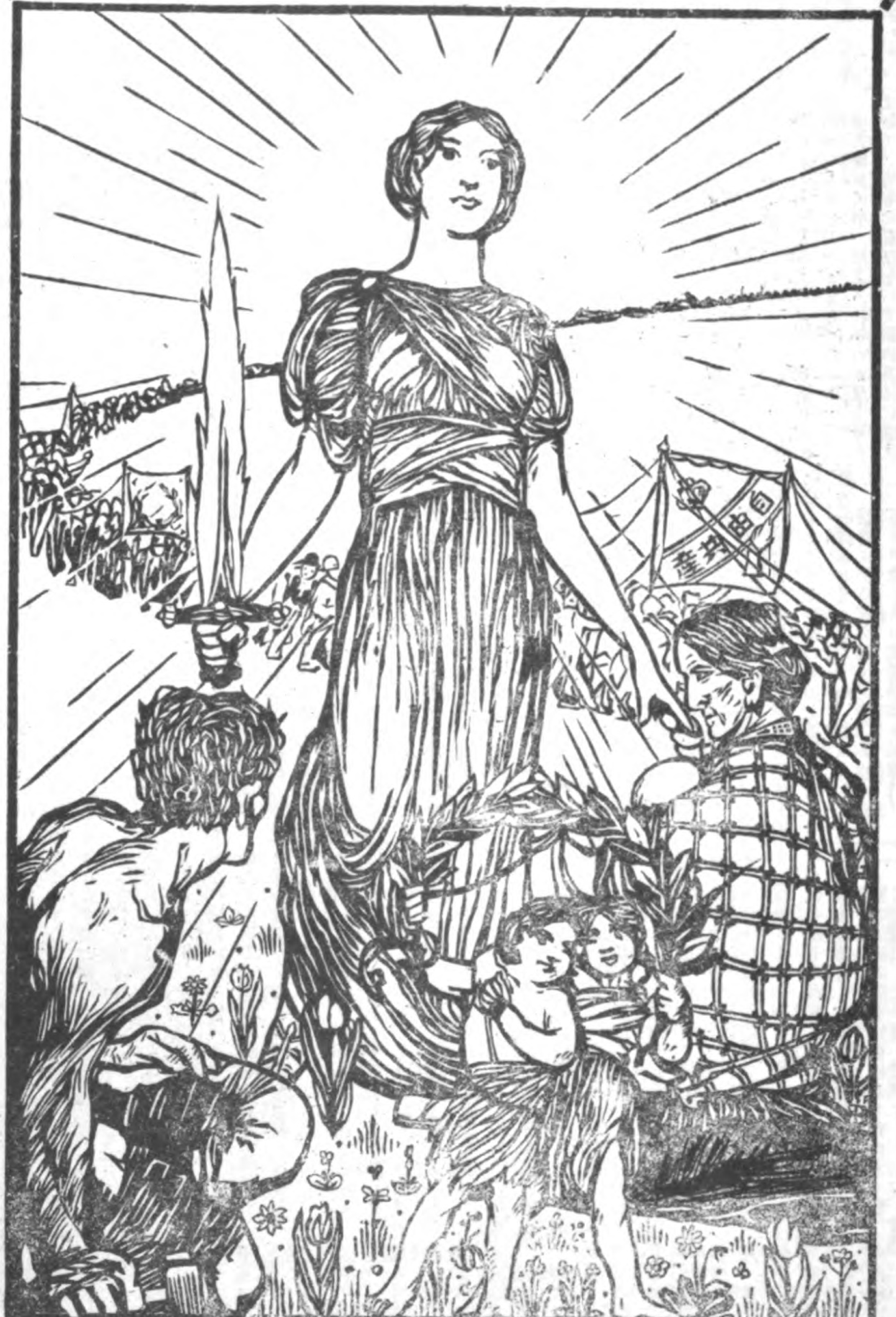
本紙は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

「婦人を解放するとは、啻に婦人に對して、大學、裁判所、議會等の門戸を開放する事のみでは無い……婦人の解放とは、臺所及び洗濯所の苛酷なる勞働より婦人を自由にする事だ」

（クロポトキン）

おいで！皆さん
世間の嘲り
押し除けて。
あれ見なさいよ
朝日の光り
照り出でゝ
自由の旗幟が
風に閃めき
すゝみ行く。

（鳴田素風）



「實際に、自由戀愛を賛成する者は尠ないが、自由慾行は甚た普通に行はれて居る。假令社會主義者中に自由戀愛を喜ぶものはあつても賣淫に賛成たと自ら聲言するものは一人も無い」

（ブラッチフォード）

Come, cast o'f all fooling, for this, at least, we know:

That the Dawn of the day is coming, and forth the Banners go.

((Morris.))

女子大に讀むべく男子盛んに讀ざる可からず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世界婦人

第三週年

(福田英)

滿二箇年の時間、長しといへば、長いが短しといへば、又た短い樣である。ライフ無窮の觀念より見れば、二箇年は天地の一瞬にも當りません。けれど、一字一句より組み立て、一章一冊より重ね來りし粒々辛苦の後を顧みれば、二年以前は、遠い昔の感がある。七百餘日の苦闘は、四十餘年の吾が全過去よりも長い樣な心地がします。

吾れ此事業に從ふや、決して吾が虚榮心をのみ滿足せんが爲では無い。又た、素より吾が生計の助けとせんとも期しなかつた其れなら、是れに依て世の婦人を覺醒せんと自ら任じたのであるか、ドウして〳〵其樣な大それた心は毫頭藏へては居りませぬ

吾れ今日までの生涯を顧みるに、悉く失敗の歴史を以て充されて居ります。唯だ此失敗の歴史を聊か多く造り來れるを自覺するが故に、此に此雜誌に從事して居るのであります。思ふに吾等が修學時代と今日とは婦人學生の狀態が餘程よく似寄つて居る。而して今日多くの婦人が失敗するのは實に吾等が失敗の歴史を繰返へすのであります。此點に於て吾等は自ら先輩たるを得るのです。

されば、吾等は素より、世の良妻賢母たる人の友となるの資格を持ちません。成功者、善人の同志たる資格を持ちません。吾等は世の敗者、弱者、及び所謂惡人の同志知友たらんとを期して居ます。又、其以外の資格を持て居りません、而して婦人の世界的絶對的解放は、是れ實に世の失敗婦人所謂墮落婦人の眞の叫呼であると信ずるのであります。

婦人解放などとは、決して世の善良なる婦人や、成功婦人の喜ばぬ所でありませうけれど、貧しき婦人、敗れし婦人の腹の底を叩いて見れば『解放』は實に彼等の眞要求であると思ひます。

顧みれば、現代社會の制度、習慣が婦人を束縛し輕視すると甚しく、加ふるに現代の社會が婦人を遇すると實に冷酷を極めて居ります。現代の社會は實に貧しき正直な婦人を荊棘の谷底に投じて更に是を笑ひ、是に唾するのであります。本誌は唯だ此墮落婦人、失敗婦人の衷心より迸る叫びを天下に發表するとを以て其任務とするのであります。

されど、吾等に學識無く、才能無く、資力無く、徒らに心に矢竹に逸れども働き常に是に沿はず、吾等が日夜心を苦しむる所は實に此點であります。本誌が婦人の世界的解放を標榜して孤々の聲を揚げてより茲に滿二ヶ年、回顧すれば、茫々として遂に何物を得たるやを知る能はず、吾等は自ら其熱誠の尚甚だ足らざるを恥づる次第です。

婦人解放の事、固より百年の大業でありまして、吾等の弱腕を以て到底其任に堪えまいとは覺悟して居ります。ケレど、滴々の雫も能く岩を穿つの譬もある通り、行く〳〵は此が天下の大運動となるであらうと信ぜざるを得ません。歐洲婦人の運動は既に吾等を案内して居ります。

女子と遺傳

安部磯雄

△父と母とは何れが多く其諸能力を子女に遺傳するものであるかこれは生物學上の問題であつて、容易に解釋の出來るものではない。然し子女が十個月間母の胎内に在ることを考ふれば、どうしても母は父に勝つて多くの感化を子女に及ぼすが如くに思はれる。

▲禁酒論を唱へる人が殊に婦人の禁酒を重要視するのは全くこれがためで、アルコールの胎兒に及ぼす害が一層甚しいのは常識によりて考ふるも明白なることである。

▲然し父と母との優劣論は容易に決し難いとしても、大体から見て父母が殆んど同一程度の感化を子女に及ぼすものであると斷定するのは極めて公平なることであらうと思ふ。

▲故に子女の能力一切に對しては父も母も同一の責任を有たねばならぬ。身體の强弱品性の良否は勿論、知力の優劣に對しても各其責任の半を負ふのが至當である。

▲子女は勿論何時でも父母の能力を半分づゝ受けるものではない。時としては父の能力、時としては母の能力を多く遺傳することがある。若し子女が父の長所と母の長所とのみを遺傳するものであれば何の心配はないが、實際は決してそんなに甘く行つてはいない。

▲父の知力は八で母の知力が四であると假定しよう。子女が父の知力を遺傳して八の能力を得ることもあらうが。亦時としては母の能力を受け繼ぐこともある。然し最も多く起る場合は父の能力八と母の能力四とを合して二分したる所のもの、即ち六といふ能力を子女が遺傳することである。

△余は實際に斯の如き數學的事實があるか否やは斷言することが出來ないけれども、兩親たるものが常に斯く信じて居ることは自分の爲にも子女の爲にも大なる幸福であらうと思ふ。

▲『女の腹は借り物だ』といふ考は飛んでもなき間違である、昔時の人は子女を得るために、血統、體格、知力、品性などを調査もせずして妾を蓄へたものであるが、全く子女は父の能力のみを繼承するものだといふ迷信に外ならぬ。

▲今日の人に斯る極端なる迷信を抱くことはあるまいが、堂々たる教育家でありながら尚ほ幾分か此馬鹿げたる思想に誤られて居る人がある。女子の高等教育を不用視する連中は取りも直さず遺傳の原則を無視して居るのではないか。

▲文明進歩の意義は一言にして盡すことが出來る。即ち子女をして兩親よりも秀くならしむることである。これを爲すには先づ兩親が有する、體格、知力、品性以上のもの少くとも其と同等のものを子女に傳へて行かねばならぬ。

▲世には父母が分業的に遺傳するものと考へて居る人も少くない樣だ。假りに父が八の知力と四の道德力とを有し、母が四の知力と八の道德力とを有するとすれば子女は父の知力八と母の道德八とを遺傳するものと信じて居る。然しそう甘く分業法は行はるゝものでない。

▲子女の中には父の道德力四と母の知力四とを遺傳するものがないとも限らぬ。而して多くの場合には前に陳べたる如く、子女は知力も道德力も六といふ能力を遺傳することになるものと考へねばならぬから、教育家は根本的に其思想を改めねばならぬ。

▲女子は品性さへ勝れて居れば知力は左程發達しなくても宜いなど考ふるのは實に愚論である、いくら男子の知力が進んで居ても、女子の知力が劣つて居れば、子女は自ら知力に於て父に優ることは出來ぬ譯だ。

▲遺傳に於ける父母の分業論は極めて險呑である。若し子女をして父母に優らしめんと思はゞ、父母は何れも體育、知育、德育に於て出來得るだけの訓練を經ねばならぬ。能力は無限に發達するものだから、我等は死期に及ぶまで訓練を繼續すべきである。然るに女子の高等教育を不用視するが如きは啻に女子の幸福てふことを顧みざるのみならず、實に子孫の利益と社會の發達とを無視するものである。

獄中の正月

(石川生)

僕は去年の正月を巣鴨獄中で迎へた。巣鴨監獄では一日と二日の兩日だけ囚人に役業を休ませて、御馳走を喰べさせて、お說教を聞かせた。

元日の朝は、いつもの通り飯と汁で、之に長五寸巾三寸五分厚五分程の大きな燒いた餅が一つ添へられた、嬉いの何のつて、其は〳〵お話にならぬ、僕は其を千切つて汁の中に入れて、お雜煮の眞似をして喰べた、元來餅の嗜きな僕は頬べたを打て喜んだ、晝にはカヅノコに金比羅牛旁、晩には鱈の煮〆といふ献立、仲々甘かつた。

二日の朝は稍々小さい餅が添はつた、中食には酢のものに鹽引が一片、晩は燒豆腐に芋と大根の甘煮、ヤハリ腹鼓を打つた。

休役中は毎日一回、坊さんの御說教があつた、當年は申の年だが、此サルといふ語は獄中の人が最も忌む所である、併し之は甚だ無意味だといふ話を四人の教誨師に更る〳〵話されたには少々閉口した。

明治四十一年の劈頭、僕は自ら赤衣の王樣になつた樣な、而して、滑稽の樣な、申譯無い樣な心地のした一事がある、元日第一着に看守部長君の戒護の下に朝湯に入り長閑な暖かい日光を浴つゝ、柔かい芝生の上で一人異例の運動を許されたと、是である。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鍛冶屋

木下尚江

三河島を出抜けて田圃の一本道を歸つて來ると、町屋の村の入口で道が分れて、一つは左へ尾久の村へ入る。すると尾久の方から一と條野川が來て町屋の村中をウネ〳〵と行く。此の川に沿いて家と家との間を少こし來ると尾寺の前で道が又た三本になる。其の右の道と中の道との角に一軒の鍛冶屋がある此の鍛冶屋の前を通り越すと、畑の向ふに僕の桑屋の障子が見える、野川は此鍛冶屋の前から道と共に曲り〳〵て、僕の家の前を過ぎて、東へ〳〵と火葬場の方へ行くのである。毎朝東京へ持ち出す靑菜は前の日の夕方皆な此の川で洗ふのだ。

鍛冶屋は朝が早い。朝霧の中に靑菜の車の音が聞えると思ふと、鍛冶屋の槌の音が日の出前の空に高く響く。僕は鍛冶屋より早く起きようと思ふたが、大抵は槌の音に目を醒まされた、僕の所の鍬も薪割も皆な此の鍛冶屋の手で修繕して貰つた。

鍛冶屋は大家内である。亭主と云ふのは最早五十近いであろう、夫婦の間に大勢の子供がある、總領は男で二十歳を越した。十三四歳の男の兒が背丈の高い好い體格。是れも下帶一つになつて大きな槌を取つて親父の前に足踏ん張つて打ち下ろして居た。其の外に未だ小さな男の兒や女の兒がある。

大分稼ぎ儲めたものと見えて、僕が此の春此處へ引き移つた頃から立派な座敷を新築して居たが、夏の中頃から親父の姿が店に見えなくなつた。何か病氣づいて東京の病院へ入院したのだと云ふとであつた。が、總領の息子が立派に親父の代理が出來るので稼業には別に差支も無いらしく見えた。

所で此の總領息子が徴兵檢査に合格して此の十二月には入營せねばならぬことになつた。親父は病院、息子は兵隊、氣の毒なことだと、近所の人達が皆な言ひ合つて居た月日は遠慮なくズン〳〵と進んで、十一月も愈々お仕舞になつた。鍛冶屋の店先には「祝何某君之入營」など、染めた幟が幾流も飾り立てられて、寒い野風に淋しく動くのが見える。「あゝ、行くのか」と僕は思つた。

二十九日の夜まで槌の音が忙はしく響いたが、三十日の朝は最早トンともカンとも聞えない。僕が晩食を濟まして、ランプの下に膝を抱へて考えて居ると、何々君萬歲」と呼ぶ聲が桑畑の彼方に盛に、揚つた「入營祝いの酒宴だな」と僕は障子を明けて立つて眺めた。

十二月一日、霜の深い朝、一昨日まで鞴の前に裸體で座つた鍛冶屋の息子は黑の紋付の羽織を着て、村の人や親類の人に前後を護られて、幟に從いて家を出て行つた。

親父は家へ歸つて來たと云ふとだ。其れは全快したからでは無い、稼ぎ人を取られて仕舞つたからである。

鍛冶屋の店は奇麗に掃除されてある。昨日も夕方東京から歸つて來て見ると、近所の百性家では星明りで未だ盛に漬け菜を洗つて大忙がしで居る中に、鍛冶屋一軒のみは最早戸を閉ぢて、燈影も洩れず人の聲もしない。

槌の音が無くなつた我が村は、朝も何となく力の抜けたような氣がする。

戀

露聲

○

「オー寒ツ、ア、宜かつた」
刺切る樣な赤城颪に吹き追はれ
砂漠の樣な廣い河原の柴小屋に
走り入つた廿歳ばかりの乙女一人
「嬉しいこと、居らしつて」

○

「寒いのに、何しに來たの？」
風除の柴垣にヒタと身を隱し
風にめげて渡しかねたる船を待つ
容姿氣高き三十歳ばかりの男子一人
「ドウしたの？　僕に用事？」

○

「えゝ別に……」
「ドウしたの？　此寒いに」
「デも、モウ之ぎりですもの！」
「何が？』
「明日は、私、モウ……」
「お嫁に行くのは知つて居る」
「其が死ぬ程苦しいの！」
「馬鹿なこと、不吉なこと」
「重治さん……あなたは……」

○

ヒユーヒユーと暴風は鳴る
つぶて混りの砂煙は立つ
赤城、榛名の山を越えて
小岩に能く似た雲々が
押合ひ乍ら飛んで來る

○

「ドウしたの？　涙子さん」
雲の行衛に眼を注ぎ
荒れ狂ふて居る景色の奥の
澄み透つた空に思ひ入り
「涙さん、アの雲御覽！」

○

半天は淸く晴れて居る
頭上まで押して來た雲々は
宛がら千切つた綿の如く
切れては散り散ては消える
「人の運命もアの雲の樣なもの」

○

「其れぢや、貴方の御心にも」
「貴女ばかりが苦しいのぢや無い」
「今となツては…、私ホンとに何しませう」
「寒いのに……、早くお歸り！」
「ドウして私、歸れませう」
「何の馬鹿な」

○

河浪は荒れ逆つて岸を嚙み
白沫は高く雹の如く飛び
水魔、風魔は、入り亂れて戰ひ
世界は宛ながら悽慘の修羅場
「重治さん、私ャもう氣が狂うたわ」

○

「あゝ皆な運命と諦めやう！」
「否、私ャ生きては居られません」
「ナゼ其樣に分らないの？」
「否、々、私ャ口惜うて堪らない！」
「何の馬鹿な、彼岸へ聞える」
「否、々、アレ浪がアの樣に狂うて居る」
「何を言ふの！　其れ渡船が來た」

歳寒

田中正造翁

村々のさびしき家の軒下も鼾音たかくみつぎとり來ぬ。

飢に泣く民の涙の露はせもなさけしらすのみつぎとり來ぬ。

親に泣く子の聲氷る寒さはだに針さすよふなみつぎとり來ぬ。

●手紙片々

▲長加部寅吉氏　さぞ御經營が困難で入らつしやいませうね。お察し申ます。が今天下一トツノ機關紙のない時ですから、どっか御辛抱下すつて、御繼續のほどを願います。成るべく賑かく穩かに願います。徒らに奇禍を買ふのは却つて損で御座いますから。貴姉の自重自愛を祈る。

▲柴田三郎氏　本業初作の準備で目下中々忙がしいのです、萬民饑えと寒さとに泣く時、學校では校舍改築、三十萬圓、ガダンピシン、一寸懇會、天下泰平。（石川宛）

▲添田養治氏　勿論、佛教にも、孔子教にも、最近の科學者の言にも眞理はありますが、夫等の眞理は悉くイエスの福音を以つて盡きて居る樣に感じますのです即ち神を愛し人を愛すべし、此の二の眞理です、私は何處までも此方向に進み度心得て居ります。（石川宛）

▲奥谷文智氏　一昨夜、福田姉より貴兄の思想など拜聽し何さなく親しく感ぜられ、一度面會申上げたきも色々多用にて失禮仕居候、別封納記一冊進呈仕候間、天理教研究の一資料とふし下さらば幸之に過ぎす。（石川宛）

▲田中正造翁　うつの宮縣會にて谷中問題も議題にありました、此上何分御助け被下度候、先日來申上候かの砂嵐事件は何分此上さらに御手數を……

▲臼倉甲子造氏　卅一號の共産社會の家庭てふ項にてフト小生が未だ社會主義を知らざる時に考へし事を思ひ出し候、小生が十九歲の頃、家政は左りまへとなり、附近の冷笑と親族の輕蔑を受けし爲め、金のうおるてふ米國に渡りて一働きせんものと思ひしが、折しも倫家にてヤハリ貧乏より家内の不和合を醸し、遂に我さ我が家に火を放ちし八十餘の老婆ありしを見て、茲に愈々初志を強くし、大資本を取得し來りて彼等と共に一大共同生活を營まんと思ひしもあり、此志遂に成らずして唯々郷里に止まりしが日刊平民以來漸く社會主義を解し得て今日は希望を有し居り候。

▲赤羽一氏　獄中吟○たみの子は朝日に似たり、あて人の運命は秋の夕づくはかな○世の人よあたに眺めそもみぢばはたみの血汐の穢れるありけり○紳士閥を蘇ふ髪に似たる哉、さびしき秋の夕暮の鐘○ひさやなば我は恨みじ世の中はとても角ても囚にしあれば

▲西川文子氏　世界婦人毎度ありがたう今日か〳〵と心まちに致し居り處へ參り候社説の共産社會の家庭は私ども常に考へ申居候事にておもしろく拜見致し申候子供も老人も社會にて養ひ社會そのまゝな共同の大ある家庭とすればなど存候へどそれは空論に候子供はよきもあしきも能親に似て居候尤また似て行くのにも候へど生れたまゝにてもるながらの雛形に候なか〳〵共同保育所などに出さるゝものにては感情上よりも出來申さず老人さて同じ事に候養育院などの老人子供の面白味もなく衣食は足り候てもいかにも死人の如く趣味も快樂もあき樣に候、居候など云はゞ共同社會の一員の權に候衣食住の心配はなくとも何の面白味もなきものに候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女性と趣味

野呂生

女權即ち婦女の權利を擴張するのは、人類が平等享樂の理想から觀て結構なことである。殊に男尊女卑の習慣に囚はれて居る我國の現狀では最も適當なこと丶思ふ。諸姉は此運動の爲めに全力を揮はる丶であらう、余も微力を致して此運動に助勢度い。然しながら權利々々と喧しく言つて許り居るも何だか法學生の論爭の樣で面白くない。權利の主張其物は甚だ好いが、それに囚へられては亦宜しく無い。出來得るならば、諸姉が斯る運動に努力さる丶の傍ら、一の趣味と云ふことに留意せられたなら其運動なり、努力なりの間に餘裕が出來て一層美はしいものに成りはしないか。

趣味と言つても、其樣式は種々ある、要は事物と自己との間に、慾念を超越した契點を認みることであるらしい。

事物を賞鑑すると云ふことは趣味の中でも最も普遍的なことである。草花を賞鑑する、書畫を賞鑑する、詩歌を賞鑑する、皆々宜しい。

そこで吾々人類が賞鑑の趣味は何が一番であるかと言ふと、余の思ふ處では人生を賞鑑するに越したものは無からう。人生を分けて見ると、生と死とになる。吾々が認識の上から言へば、生は死に比して余程長い。生こそ人生の大部分を塡充する所のものだ。即ち人生を賞鑑するの趣味は生を賞鑑するの趣味であるとも言へる。

生を賞鑑するには、吾々の此實生活を離れて其れを客觀せねばならぬ。當面の事實にのみ追れて居ては到底それを賞鑑することは出來ない。

凡そ生の事實を客觀すると又多樣な趣きがあるもので其事々に役せられて居た時よりも遥かに餘裕のある身に成ることが出來る。其故は賞鑑なる一事の中には「慾念に超越する」と云ふ一大事が含まれてあるからだ。

元來婦女子は、事物に對する客觀的態度に缺けて居る。固よりこれが惡いと云ふのでは無い——是は善惡の問題ではないから——只長短所と云ふ迄であるが、却て特長であるとも言ひ得やう。假令特長であつてもそれが爲めに生存に窮屈を覺えるやうでは面白くない。そこで此物事に對する客觀的態度と云ふことに留意されたなら、人生の賞鑑が出來るやうに成るであらう從つて餘裕のある生存、物事に役せられないと云ふ美はしさを發揮することが出來ると想ふ。

「生を客觀する」言葉は簡單であるが實際に於て甚だ困難である。如何にせば此目的を達することが出來るか、よし達せずとも其端緒に近よることが出來るか、先づ自己を客觀す可しである、己が境遇、教育、思想、感情等を觀察すると、得意、失望、戀愛、信仰等に對して、過去自己が執つた態度等を想起して冷靜に打眺めるなどは、自己客觀の大綱である。

生を客觀するに、先づ自己を客觀するのは宜しいが、其一々を批判するには、矢張り他と比較せねばならぬ。だから寧ろ批判は止しにして、只どうだつたかうだつた、位の處で停めて置いた方が簡單で宜しからう。

自己を客觀する第一手段は自己が過去に於ける、内外兩面の活動全部を夫れ〴〵頭の中に再現すれば好いのである。此再現を主觀的にやると追憶に成つたり回顧に成つたりして、宜しく無い、全然他所のこと他人の遣つた事として冷やかに看ねばならぬ。だから善惡、良否等は忘却して居た方が余程樂に遣れると思ふ。

未だ充分言て盡されない樣に思ふが、其要點は、物質的な婦女子に趣味を鼓吹する爲にあるので、それには、生の賞鑑と云ふことが好く生の賞鑑は先づ、自己の賞鑑からなす可しと云ふにある。其結果は生存に餘裕が出來て女權擴張運動なども色彩に富んだものに成るであらうと云ふにある。

漫言放言

思水漁郎

『十』

祈禱は捧ぐるにあらず、ねだる也、体のよき無心に他ならざるなり。懺悔は一種の虚榮なり、風變りの惚言に他ならざる也。さればこそ、祈禱といへ、懺悔といふも、さ程効顯あるものにあらざるなれ。

『十一』

下宿樓上に學生を訪うて、その娘義太夫論を聞くもの、誰かその深宏なる智識に驚かざる。更に話鋒を轉じて現時の米價を問へ、吾人は彼等の無智殆ど小兒に等しきに呆れ果てむ、而かも彼等が講堂に學ぶところは高遠なる倫理なり。書架に金文字鮮やかなるは經濟學也、商業通論也。

噫、半熟の鷄卵はなほ食すべし、半熟の學生に到つては之を奈何せんや。

『十二』

鸚鵡よく言へども飛鳥たるを免れず、腐儒よく讀め共なほ本箱たるに過ぎず、さればこそ彼のホッブスをして「余は世人ほど多く書を讀まず、故に世人ほど愚ならず」てふ言を吐かしめたるなれ。今の世にありては本箱たるなほ稍々恕すべし、希くは下駄箱たる勿れ。

『十三』

所謂紳士諸卿、吾人は卿等が銀座街に馬車を驅つて揚々たるに憚くものに非ず、又櫻晴花明の下に卿等が艶粧麗飾の痴態を演ずるを羨むものに非ずして、まづ卿等を憫むもの也。卿等よ、卿等が口にせるシガーの蓬々たる煙は、以て自己を攻むるの烽火たりと知らざるか、更に賤妓が亂打せる琴々たる鼓の音は、以て卿等を攻むるの砲聲と悟らずや。

憐れなる卿等よ、まづ其痴情の雲を拂へ。

『十四』

文士筆を執つて文壇に立つ、何ぞ勇士の出陣に異らんや、一卷の書を著すは一城を奪ひたるに等しく、一篇の文を綴るは一州の領土を加へたるにもたとへつべし。さあれ是等の書一度現はれて、よく十年の生命を讀書界に保ち得るものに到つては、吾人の寡聞之を耳にせることを、寥々として未だ曉天の星にも比し難きを悲しむ。今日讀まれて明日は古本店頭に淺間しき遺骸を曝す哀れなるは彼等が運命なるかな。

試に神保町街に立つて古本屋の店頭を瞥見せよ、累々たる著作の遺骸は、推く積み上げられて、賣價一冊三四錢、高價なるもなほ十錢二十錢を出でざるもの多かるべし。其中には博學を衒ふ某博士も砂風呂を浴び浩識を以て知られたる某大家も恥面を曝せり。況んや所謂自稱文士の輩に至つては、二束三文の果敢なき最後を遂ぐるを見む。

あゝ、これ何に依つて然るか、他なしそは彼等の罪なり、自業自得なるのみ。

現今の文士は余りに世才に長けたり。滿腔の熱血を傾注し、渾身のエネルヤーを發露して、苦心十年、一卷の書に心魂を費すの勞を厭ひて、多く金錢と歡迎を得るの術を計り、一の定見なく一の主義なき片々たる漫錄を集めて一束となし、徒に辭句を飾り或は挿繪、表裝に意を凝して人を誘はむとす、これ既に文士としての第一義を忘れたるものにして、其狡、其猾、笑ふに堪へたり。

借問す文士諸卿、卿等は古人の所謂「語世を驚かさずんば死すとも止まず」の意氣ありや、「詩卷長く止む天地の間」の自信ありや。

獄中消息

▲赤羽一君

◉前便御落手の事と存じ候○未だ少々金もあれば夫れを君の許に宅下げせんとは思へども左樣するを、此れから赤人になりて郵送宅下げ料に差支へる次第故、ワザト差控へ申候○監獄にての讀書は實にならず、マークを附する事もノートに取る事も叶はず唯だ漫然讀過するのみなれば趣味も感興も印象に殘らず候、左れど僕は夫を怨まざるべし、知識畢竟何をか爲さんや○大分監獄は寒くなり候、此れから赤人は大閉口に候○此頃は『戀愛』に附き考へ居り候、ドウも閑故種々な事を考へ候○戀愛を解せざる人は半ば死せるなりとゴルキーは申し居り候然しながら僕思ふに戀愛は幸福を意味す滿足を意味す『我れ汝を愛す』と云ふ事は『我れ汝に幸福を與ふ』と云ふと同じ、左れば幸福も滿足も與へ得ざる人は戀愛する資格なしと存じ候○僕時に顧みて寡婦の如き孤獨の寂寞に泣く事ありと雖も幸福も滿足も與へられざる悲慘なる戀愛の成就に泣かんよりは増しと存じ候○君よ僕はつく〴〵と現世にて人情を盡す能はざるを嘆ずる者にて候○僕は人情を盡す能はずして一人の母を殺せり、而して今や多くの弟や妹や友人等を困らせつゝあり、あゝ余は實に非人情の惡漢にて候○此間御願ひせし本を是非頼み申候、アの外にユーゴの『ミゼラブル』都合七冊差入れ被下度候○此れが未決監よりの最後の手紙にて候○御序の節渡邊君に『十二朝軍談』と『風來山人傑作集』『日蓮遺文集』英書『佛蘭西革命前記』四冊を差入れる樣に御傳へ被下度候○石川君羽織有り難う此間の手紙は着いたかね、身体を大切にし給へ○逸見夫人福田女史御變りなきや○以下獄中吟三首○くらやみのひとやに坐してリバチーの光の國にこがるゝ身なり○めいかくを思ひ寐ればやギロチンにかうべ斷たると夢むもありけり○くろがねの家さす朝の光をはめいかくの火と喜びぬ我れは○明日か明後日には赤人（逸見氏宛）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

基督教社會主義（二）

米國 Henry, F. Ward 師講演
石川旭山生譯

六、社會主義と物質主義（承前）

彼等の一人は記して曰く『何れの時代でも、社會的、政治的、法律的制度を形成する最も重要なる根本的要素は經濟學である。此原理は、社會運動の究局的要素を明示し、人の精力を決勝點に集注せしむるものである。素より此他に歴史上の要素が、寧ろ理想的要素が存するとを否定する譯では無い。唯だ普通の人には經濟的利害が所決點たるとを主張するのである』と。

此觀察は決して他の勢力を除外する譯では無い。是れ唯だ經濟的勢力が吾人の思ひしよりは一層強力なるとを、表示するに過ぎぬ。エンゲルスは、此原理はダルヰンの說が生物學上に於ける如く社會學上に位すると言ふた。吾人はダルヰンの假說を承認したりとて、其爲に決して人を無神の世界に放下せざるとを認む。之と同じく經濟定命說の原理を承認したりとて、其か爲に決して人を物質的歴史觀に放下しはせない。

七、階階爭鬪

玆に社會哲學としての社會主義は、社會運動としての社會主義中に沒入する。實際運動の心理に於て階級爭鬪の自覺を存する社會主義者は階級的自覺の上に立つとを自ら誇りとする。是れマルクスの經濟定命說より來るのであつて、之に就きエンゲルスは曰く『されば人類の全歴史は、階級爭鬪即ち押領者と被押領者、後者と被後者の間の爭鬪であつた』と。かくの如く人類の發達は階級爭鬪の連鎖を透して進んで來た、第四級民が資本家御沒を顧視して生產手段の公有制を建設せんとするの爭鬪は實に其頂點に達したものである。此說に基く所の人類歴史の連續的階級は、即ち未開時代、野蠻時代、封建時代、資本制度時代、社會主義時代是れである。

歴史上の物質觀、階級爭鬪觀に基く所の兵法は、能く人の謂ふ如く『現在社會の避け難き審判を迅速ならしむる事及び瓦解後の新社會に進入すべく社會主義軍を組織する事』是れである。かくて社會主義者は世の救濟に何等の努力をも致さずして、唯だキリストの再來を希望せし古代基督敎徒の如き地位に立ち至つたのである。社會主義運動を物質的歴史觀より遠けつゝあるは、多くは此綱領の實行上の失敗である。故に階級爭鬪によりて進步の結果を豫想する所の經濟定命說は、事實に於て宇宙の人格觀に歸着すべきである。

社會主義を一種の根原的な世界的な社會運動として考ふるに其最も著しき事實は階級爭鬪の自覺である。之は基督敎に背反するであろうか。淺薄なる評論家は之を以て單に物質的利益の爲にする或階級の爭鬪なるが如く論ずる。我國の社會黨綱領は、正當に存在すべき唯一の階級として勞働階級の勝利を唱ふ、されど此事自身が既に階級の禁止を意味するのである。社會主義者は大威力を以て絕叫する、此社會を鐵の楔を以て階級的に分割するのは即ち資本家組織である、吾等の目的は之を合致せしむるにあると。之に就きて共產黨宣言には既に久しき以前に次の如く謂ふて居る『平民は（其勝利に於て）一般に、階級及び階級的對立を存する條件を擯除すべく、又、之に依て自己が一階級としての超越權を廢止すべし』

社會主義は憎惡と競爭とを宣傳するものでは無い。社會主義は事實上の勞働者の爭鬪はさに其慘狀を記述しない、社會主義は階級的自覺を敎へる、乍併、之は社會の下層よりは寧ろ上流に多くある事だ。富者は平等の平野に於て貧者を待遇するとが出來ぬ。富者は貧者の倭屋や小室を以て其ホームと感ずるとが出來ぬ。資本家の爭鬪は非常な憎惡心を以て行はれ、非常な暴力を以て行はれ、時として、法律の假面を被りて行る、されど其爭鬪は、階級爭鬪を唱ふるの代りに個人主義、個人の權利を說くが故に社會分裂の原理として責められない。社會の分裂的分子には非基督敎的分子である。而して今日、此種の分子は、賃銀勞働者の無法よりは寧ろ資本家の無法に多く基くのである。

八、社會革新

階級的爭鬪は之を革命亂として說く者がある。されど此文字は多く平和的意義に於て社會主義者に使用される、社會に應用されたる革新を意味する。尤も其階級爭鬪とは戰爭を意味する時代であつた。初め獨逸に於ては、社會民主黨の勝利は之を平和的に來らすと能はず、唯だ暴動と鮮血とを以てのみ之を得べしと考へられた。彼等は暴動的無政府主義者が其運動を占領するのを發見した。而して之を排除して以て平和的政治運動を開始するに至つた。彼等が赤旗を使用するので其新聞は怖れられた。是れ人類血液の共同、勞働者運動の共同を表示するのである皇帝が伯林の市街を通行するに際して、赤き傘を翳したお婆さんでも居やうものなら、密行巡査は直ちに之を遙か路方に連れて行く、此赤色がヒドく皇帝の逆鱗に觸れるからである。されど我國に於ては赤旗は、陰謀や殺害、標章では無い。社會主義は資本家を待遇するに個人其ものを相手とするのでは無い。階級戰爭の如きも經濟的發達の必然的階段としてのを見る。

されば社會主義に於ては之にクリスチヤンてふ文字を結び付けるとを妨ぐる點は一つも無い。さて玆で、此兩者を結合せしむる所の合致點を問はしめよ。

第一に予をして現在社會制度の批判に就て云はしめよ。予は過去の社會制度が現在のそれよりも善良なりしとを信ずるものでは無い。人類の歴史に於て將來に對して斯の如き希望を存せしとは曾て無い。されど其希望の眞の基礎に、吾等の良心が非行に對して感覺銳敏となり、吾等の道念が罪惡を見ると銳利になるの事實に存する。吾等の中には多くの大なる罪惡が流行する。併し、吾等の危險は是等の事には存じない。却て救の手に觸れざる」改良運動を叫ぶ所の心理狀態に存する。吾等の最惡なる敵は平和無き所に、平和、平和と叫ぶ人々である。吾等の最善なる友は、次の如く吾等に談る人である。『歴史を大觀するに、西洋文明は今や其發達の最極點に逢着して居る。即ち第二十世紀は、第二十一世紀及び第二十二世紀に於ける漸次的瓦潰を現はすべき破壞を劃するか、若くは、野蠻及び不義の中風から少年なる人類を解放し、人類の智識的、社會的道德的の進步を開始するの起點となるであらう、約言すれば、社會的宗敎の復活が、若くは洪水が、二者其一である』

社會主義が現存制度の批判をするが故に保守的思想を有せる、殊に占領せる利益を有せる多くの人は之に對して大聲疾呼しつゝある。マコレーイは、若し占有せる利益に係はつたなら、重力の原理は受容せられぬであろう、と言ふて居る。されど活ける神を恐るゝ者は決して是等の小さき神、世俗社會の金錢の神を尊敬せぬであろう。宗敎が儀式的―となつた時の危險は斯くあるをいゝ、要すてふ點よりは、寧ろ、斯くあるてふ點に危險が存するといふ其事である。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

空裡光（五）

南無百南無十隱人

神と人

「爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び懼を懷く靈に非ず、アバ父と呼ぶ子たる者の靈なり」羅馬人の一五

「夫人者天地之心、天地萬物、本吾一體者也」（陽明）

「誠者、天之道也、誠之者、人之道也、誠者不勉而中、不思而得、從容中道、聖人也、誠之者、擇善、而固執之者也」（中庸）

［一］

人は母の造つたものでは無い。母より產れたものである。人の心靈は亦神の造つたものでは無い、神より產れたものである。人は獨立の生命と自由の心靈とを有するものである、然れども茲に吾等は尙ほ一段の考察を施さねばならぬ。

眼を開いて天地の萬象を見よ、總ての事物は唯だ生滅、流轉して常無く、中心無く主宰無し。然れども、眼を閉ぢて自己の內秘を見よ、一切の心象は相集合し、相連結して、內なる「我」を主宰となし、而して其下に統卒されて居る。之を客觀すれば宇宙は無主である。人は唯だ遺傳、運命、浮動物に過ない樣に見える。萬物流轉の一塊土の兒なるが如く見える。絕對に獨立と自由とを有せざる如く見える。然るに、之を主觀する時は、我等の衷には昭々乎として御主人が居る。而して自ら生き、自ら考へ、自ら意ふ。絕對自由の心靈が此內に秘んで居る。

［二］

前の觀念に入る時は、吾々は絕對他力の信仰に進むが當然である。一休の歌に

世の中に寢た程樂はなきものを、知らぬたわけが、起きてはたらく。

わが役は、心にいらぬ役なれど、天の作者のさし圖、是非なし。

などと言ふのがあるが、眞とに如此考へねばならぬ筋合なのである又た此萬物流轉の狀を目撃する時は人は自ら「無常」を感ぜざるを得ない。釋迦が路傍に呻吟する老病者を見て忽ち厭世觀を起し「此世の有樣は恰も電光の如く、石火の如く、無常のものである」と言ふたのも此事であるが、まことに是は人生の實狀である。

聞たびに、餘所のあはれと思ふこそ、なき人よりもはかなかりけれ。

と慈快僧正といふ人の詠みたるは、實にもと思はるゝのである。今まは人の死を聞きて哀れと思ふて涙にくるゝもの、其他人を思ふ中にも時々刻々死につゝある吾等こそ、亡き人にも增して果無い身の上では無いか。あゝ眞に「空の空なる哉」と叫ばざるを得ない譯である。

［三］

然るに、常に「神の子」なる自覺に育まれ來りし耶蘇は之を如何に觀念したであらうか。

「生命の爲に何を食ひ何を飮み、また身體の爲に何を衣んと憂慮ふ勿れ、……なんぢら天空の鳥を見よ、稼ことなく積ることを爲ず、倉に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ給へり、爾曹之よりも大に勝るゝ者ならず乎、爾曹のうち誰か能く思ひ煩いて其生命を寸陰も延得んや、……爾曹の天の父は凡て此等のものゝ必需ことを知りたまへり、爾曹まづ神の國と其義とを求めよ、然らば此等のものは皆なんぢ等に加らるべし此故に明日の事を憂慮ふなかれ、明日は明日の事を思わづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり。」（馬太六の二六以下）

まことに素直である。素直な子が親を信ずるの心である。「其生命を寸陰も延得んや」と觀念しながら、少しも厭世に陷らないで「まづ神の國と其義とを求めよ」と言ふのは、實に其赤子の自然の致す所である。何の疑惑も、何の苦悶も無く、ハツキリと度胸のすわつた樣は如何にも偉大なる出立である。

［四］

吾等今、眼のあたり此の偉大なる風貌に接しては、最早一言の此に挾むべきものが無いのである。乍併尙は少しく凡夫の思慮する所を述べて暫らく同行の友の參考に供して置く。前に述べし如く人を自然界の一物として之を客觀する時は、天地に中心無く、萬物に主宰を存せないのであるが、顧て自ら內觀すれば、自主の心の確然と存立するのを見る。而して此自主の主觀を無主の客觀に沒入した狀態は所謂「無我」であつて、恰も一滴水を大海に投じた樣なものである。無主の客觀を自主の主觀に包容した狀態は之を「大我」とも言ふべく恰も家父が家族を統一する樣なものである而して此無我觀の究極は即ち「絕對的虛無」であつて、此大我觀の究極は即ち「絕對的心靈」である。更に此無我觀と、大我觀とを綜合到徹して無對の大道を打開する時、虛無の大虛は始めて無限光を放つのである、かくて此大道に於て、神と人とが相會する時兩者の間は恰も寶鏡の相對するが如く相照さるゝのである。此に至て、神人の關係は既に有意の關係には無い。既に識盡くると雖も、情未だ消えたるに非ず。意無く識無くして而も「アバ父」の叫を起す所、是れ實に神人不二の光景である。神子の自覺は此に始めて圓滿となり、絕對的の自由は此に始めて實現されるのである。かくて始めて「天地之心」たる人の本分は完ふされるのである。既に「人之道」（陽明の引照を）過ぎ來りて「天之道」を濶歩するの境涯となつたのである。先きに絕對的無價値なりし我は一轉して絕對的意義を有するに至つた「天上天下唯我獨尊」の語は始めて意義あるものとなつたのである。

老丐嘆！

露舟樵郎

物凄い雲が頭の上を抑えた樣に、襲ふて來た。草も木も蟲も鳥も冬籠りの用意に急いで居る。つい其所で烏が阿呆阿呆と鳴つた。何だかつまらい氣がする——人と生れて彼の烏に及ばないか……と思ふと、ありありと其象が描寫れて丸で夢でも見る樣だ。毎日斯うして九尺二間の掘つ立小屋を——金の殿玉の殿と——思念を込めてもう何回造つたやら。やつと雨露の凌ひして、も一つ風防禦をする計り、やれ嬉しや一夜の休息……、……惡夢に躍ぶられて眠もやらず、いで仕上げむと來て見れば、噫！ てはそもいかに？ 譫奴が爲したる惡戯ぞ、消えて冷たき死灰の跡もなく、おゝ只白々と……悲憤の血涙嚙みしめて張り裂く胸を押し付けて、これで最ふ早一二三四五回目だ。叱つ！つくづく默想えて大觀ると、今の世は皆これだ——建てる！燒かれる！造くる！奪られる！——そうしてオ仕舞ひは何だ？ 寒！飢！病！死！、おゝ死乎！死乎！不安なし。恐怖なし。ン！烏よくいつた、所詮迷夢に彷徨つてる。狂つた頭腦では解けない解けない。謎を汝は悟らせ樣と叫ぶのだな………鳴け鳴け九天高く………。げに汝の身は眞！自由だ。叱！恨めしいわ!!

○手紙片々

▲二葉庵覺非氏　ヤツと汽車に乘れる樣に相成り、十五日上京仕候、これから十二月二十日頃迄大々的奮闘を要し申候、大分番課を遅れ申候ため死者ぐるひに御座候

▲田中正造翁　誠を以て人に及すのみ○谷中問題行政の破壞も法曹家の發見にあらず政治家の識査にもあらず、何等法律になき溺水の文字に苦められての發見です、嗚呼此上の御示教をいそぐ

▲横濱醉伯より　高知縣の洲崎町の丸屋樓の抱藝妓まさを（十七）と云ふは、性質溫柔容貌美なるが爲に人買の手に罹つて賣られ來りし者なるが、樓主の虐待に堪えずして沈鬱にも此樓さへ無くば此虐待を免るべしと思ひ詰め、遂に此樓に放火して警察の手に捕はれたりと聞く、彼の怖ろしき暴力の抑壓に對する酬報か克く繊弱なる少女の手によりて大胆に支拂はれたるは痛快に存候

▲大須賀里子氏　在監中は御厚意に預り有がたく御禮申上候　就ては、昨日出獄仕候間御安心被下度候

▲村田四郎氏　同志會回覽雜誌の編纂仲々に困難に御座候、今日は土地國有論に關する大議論を試みる積りで書き初めたのですが、余り長いとカアチヤンに叱られる（編者曰く村田君病氣の爲め）から此れで止めます

▲田中翁　利根川問題は事實問題なり、法律や理窟で水勢を壓制し得るものでない、水は自然に低きに行くものを罪惡人造の水害たる利根川の洪水は、上に向ひ逆流し、上流拾四里足利に溢けり、洪水に際せば土砂は荒浪と共に上に向て流れ走れり、此一事を以て天下の逆境も亦一目瞭然たり

▲逸見斧吉氏　昨夜田中翁の手紙を受取つた中に次の文句がある。出來る事なら石川兄をつれて行つて日光の山の中へ捨てゝ來て下さい雪風にさらして來夏に瀧にさらしたりかけたりして三年ばかり山の中へめし丈を送る人を見付てあげては如何でしやうこれにて「石川君をふ」と再啓して大惱は僕等夫妻に日光見物を勸められた手紙だ最も石川兄には限るまい、僕自ら誰かに日光へ打ちやつりに連れて行つて欲しいものだ、てゝには只常に君を思ひ君を忘れざる翁の心の赤さをしのびながら報ずるのだ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

佛國基督教社會主義者

ラマンネイ

石川旭山

其一、略傳

Hugues Félicité Robert, Abbé De Lamennais は一七八二年佛蘭西聖マロに生る、船大工の子なり、彼は基督教社會主義の最初の代表人物なり、彼は最初佛蘭西に流行せる懷疑的物質主義に反抗して寺院に入り、一八一七年僧職を受け、聖マロに於て一教師となる、是より先き彼は王を輔けてナポレオンを攻撃せし爲め遂に英國に亡命せしが一八一七年佛國に歸れり、而して同年より二十年に亘りて Essai I. Indifference en Matière de Religion を發行せり、一八三〇年 L'Avenir 新聞を創刊し「神と自由、法王と人民」を以て其題目とせり、彼の門弟は甚た多かりしが La Cordaire 及び Montalembert 等は其内名あるものなり、一八三一年彼は羅馬に至り、法王に面せんが爲に待望すると數日、遂に志望を達せざりき、彼の信仰は其目撃せし事物によりて動搖せしめられぬ、彼は羅馬主義と民主々義との間を彷徨せり、一八三二年八月十五日に於ける法王の一翰狀は暗に彼の L'Avenir を非難せり、而して彼を教會より放逐せり、暫時沈默を守れる後、彼は其の炎ゆるが如き「一信徒の語」(Les Paroles d'un croyant) に於て一世を驚歎せしめたり、彼は此の書に宣言して曰く「基督教は愛と奉仕なり、佛蘭西カソリックは之に反す」、法王は之を非難せり、彼は之に種々なる書に於て答へたり、彼は民主々義の豫言者として社會主義基督教結合の豫言者として顯はれたり、一八三九年彼れ一小冊子を發行せしが爲めに禁錮十二月の處刑を受けぬ、一八四八年の革命に際り民選議院の代議士に選出せられしが、クーデターの後、彼は自ら公生涯を退きぬ、一八五四年死す、彼の素志に基きて Pera La Chaise に於ける無名の墓に葬りぬ、而して葬式に關する教會の提言には一も從はざりき、宗教は起居進退、政治、藝術、科學、哲學等總て人生々活の眞正なる進歩の根源なりとは彼が熱心なる信仰なりき、彼はマヂニーの如く、權利よりは寧ろ義務に於て感興を有せりき、次に掲ぐる文章は即ち彼が「一信徒の語」より拔粹せるもの、是れ彼が近世の雇主が其勞働者を虐待すると古代の奴隸所有者よりも如何に甚だしきかを示せる也。

其二、「一信徒の語」

「さて玆に一人の邪慾なる憎まれ男があつた、此の人は頑丈でありながら勞働が嫌なので、或時獨語を云ふのに「ハテドーしたらいゝかしら、働かにや喰へぬし、ト言つて勞働はとても己にや堪へれんし。」

「此時魔府より現れた一思案が忽ち彼の衷心に浸入し、夜深けるを待つて兄弟達の寢床に入つて、安かに眠れる彼等を捕へて蹤の鎖に縛り上げた。

「ソウして彼は言ふ、彼等を鞭で以て逐ひ使はして己の爲に働かせるナ、ソーして生産た物は己が食ふト。

彼は其の決した通りをやつた、他の人も之を見て、其通りを行つた、そして地球上の人間は最早兄弟では無くて唯の主人と奴隸とに成つて了つた。

「是は地球の全面に亘つて悲慘なる哀哭すべき日であつた。

「其後久しく經て他の一人の男が興つた、其男の殘忍な邪慳な事は前の男ところでは無つた。

「此男、到る處に人が群集し、其群集が數知れぬ程多いのを見て、獨語を云ふのには

「此輩を網つたり、此輩を働かせたりするのは易いが、併し此輩を何時までも働かせるには食はせたり、着せたり、何かせにやならんて、宜い、仕方が無い、彼輩が勝手には少しも働かせないで、此方の仕事許り爲せるナ、ソれやホントに死ぬだろーが、併し人數が馬鹿に多い、彼等が深山ぬ迄には己の方の財產が大分貯るから、何時までも續けて行けるだろー。

「其には此輩に勞働賃を拂ふ而して其れで此輩は生きて行かれるだろー。

「此く云ひながら其の群衆の中から幾人か呼んで此れに談じた、お前達が六時間働けば幾何許の賃錢をやるし、十二時間働けば其倍やる、其れでお前方、御前方の女房と小供とを養ふ事が出來よう。

「彼等は彼の云ふ事を信じた。

「すると此男は云ふた、一年の日數にして見ると御前方は一年の半分しか働かない、年中毎日働いてゝろ、お前方の取り分は倍になるぞ。

「彼等は倘ほ此れを信じた、

「扨て一般に働が起つた、需要が少しも增さないのに、勞働の分量が二倍に增した爲め今迄で勞働して生活して居た人間の半分は其生活の口を失なつて仕舞た、

「其所で、彼等が信じた此の邪悍男は彼等に曰く一己は凡ての人達にお前達と同樣に勞働を與へてやり度いと思ふ、……すると御前達ちにも此れ迄の半分しか賃錢が拂へなくなる、實にお前達にも氣の毒だが、併し己れも其爲に倒れる譯けにもいかんからなア」

「素より彼等は妻子等と共に飢の悲みに耐へ兼ねる譯なのだから、此の邪悍男の申出に從つた、加之に彼等は彼を祝福するのだ、彼等は曰く「彼の人は己等を活して吳れるのだ」

「斯くの如き手段で此の邪悍男は引續き彼等を欺いた、而して常に勞働を增し、賃銀を減じた。

「遂に生活の必要物の欠乏の爲に彼等は餓々と死んで行く、他の者は代つて壓制を受ける、ソコデ此土地では財產と云ふものは非常な恐ろしいものとなつた、

「一家族がパンの一片を得んが爲めに全家族が身を賣らねばならぬヨ！になつたのも畢竟此の財產と云ふもの丶爲めなのだ、

「其の兄弟達に對して邪慳な殘酷な此男は彼等を奴隸にした所の邪悍男よりも多くの財產を蓄積した、

「此の後の者の名は暴君と呼ばれるが、前者の名には獄でも未曾留めて罰なかつた。

如是我聞

北澤可笑生

○結婚と賣淫、是れ女子衣食の道なり、而して兩者均しく賣るなり、一は賣淫にして一は切賣なり。

○惡德を形容するの文字、皆女の字を以てす、曰く姦妬嫉、惡德は女子の一手販賣となせしは東洋思想の汚點なり、豈無恥ならずや。

○人の妻たる者は所謂高等下女なりと或人云へり、下女は唯手足の勞をなせば足る、而も妻たる者尚他に一の重大なる任務有り、愼むべきかな。

○人の妻を稱して奧樣と云ふ、奧とは人目に觸れざる所を云ふなり、昔時男子の嫉妬心深く、女子を一室に入れ、男子との交通を遮斷せしより起りし名なり、所謂拜物主義の別名なり。

○女子の貞操と云ふ、未だ男子の貞操と云ふを聞かず、貞操は女子の專有物なりや、女子に必要にして何故に男子には必要なきか、男子は性情劣惡、到底貞操を守るの理性なきがなるやも知れず、世上の男子戒愼せざる可けんや。

○女權擴張と云ふ、亭主を膝下に敷くの謂に非るなり、婦天下の世の中にする譯にも非るなり、安心せよ、頑冥守舊の徒、爾汝の跋扈を蹴踢し、汝の奪へる或者を返せば足れり。

○俚諺に曰く女心と秋の空と、されど女子は總てに於て男子よりも熱心なる者なり、玆に於て吾曰く男心と秋の空。

○囚はれたる婦人、奴隸中の奴隸、是れ現今に於ける婦人の地位なり、吾百千萬言之を說く、而かも未だ法界的に聞く耳の興を起さず、[illegible]千萬人の一人だにも注意を掛けざるなり、何ぞ其の脫さきを知らず、恐る可きは習慣の惰力なるかな。

○女子の地位を嘆じて之が改革を云々する者皆云ふ、婦人問題と、是れ婦人を單位としての立論なり、何ぞ根本的改革をなし得んや、なんぞ男女問題と云はざる、是れ野蠻の迷妄の言なり。

○婦人をして從順なれと云ふ、されど無氣力たれとには非るなり、又同く活潑なれとされど又はねつかへれとには非ざるなり。

篤志の女學生一名世話したし

一と通りの學校教育あり、[illegible]素養あり、女學[illegible]もてなし[illegible]にて婦人[illegible]とする[illegible]女學生を[illegible]婦人[illegible]にいり[illegible]雜誌[illegible]及編輯を見習ひ、[illegible]化分あり、衣食[illegible]但し[illegible]御方は[illegible]自身の[illegible]せられたし、手紙に成るべく[illegible]められたし。

Kiichi Kaneko
Girard Kansas

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

粂公

白衣

一

「何じやな、お春さ」

不意の人聲に、お春は驚いて、振り返つた。「兎が逃げたの」と小聲に云つて、又御傍の叢を搖かして見る。

荊棘がびつしり生ひ茂つて、隈笹さへ根を込めて居るので、三尺先も見通せない。茨の茂みは、一町歩にも廣がつては居るが、處々にかたまつて生へて居るので、其間々々には、雜草が在るだけで、人の行けぬことはない。

「何疋え丶丶丶一疋な、まあ好かつた」と、しひて安心したらしく

「とてもじやはな………………出かつせ〳〵捕れよかさ、お春さ…………何時かも村長さのが逃げたがな、とう〳〵分明らせんだに……如何機、一疋の野兎が、此荊棘の茂みへ逃げ込んで見れば、探し當てるのは、仲々のことであるまい」。

お春はにつこりして

「仕方ないは」と、小さな失望と言つた風に、獨言を殘して、女と擦れ違つた。

二

初秋の空は、氣もち好く澄んで居る。柿の實が夕日を受けて、赤々と光る。今年は「なり歳」だと、村の人は言つて居るが成程、見事に成つたものだ。

其柿の根方に、稲笠を敷いて、煙を吹かして居るのは、無職の粂公である。「粂公の年齢に、實の所分明でない。然し、戸籍簿は明らかに、三十二年七ヶ月と決めて居る。粂公は、そんなことに頓着する様な男でない。粂公の教育は殆んど、零であるが、膂力は、衆に勝れて強い。

只、五尺と云へば、日本人の身長としても低い方である。粂公は其低い軀體で五斗俵を安すく〳〵と、擔つぐ、片手で中結をつかんで、三度位いは、上げ下げする、是が粂公自慢の力瘤であるのだ。

粂公は滅太に人と口を利かない、或は生來の無口なのか、言ふ事が無いのでもあるまいとは、村人等の噂である。

其粂公は、今しきりと煙を吐いて居る。

兎を逃がしたお春は、未だ未練氣に後を振り向き〳〵、屈んだり、伸び上つたりし、小流の傍まで來た、偶然、流の向ふに居る粂公を見ると、何故か、急に顔を曇らして、早足に行き過ぎ様とした。

粂公は既に立ち上つて居た。

節くれ立つた、大形の手で、敷いて居た笠を鷲づかみにして、にたり〳〵笑ひながら、手畑を横切つて來る。

「待たつせ……よ、待たつせ、お春さ」お春は、いや〳〵立ち留つた。

「何んなの……」と、向い向いたなりで、鬢のほつれを掻き上げて居る。

「兎……居たかな……」

既に粂公は知つて居る。

「い丶え……」とさも氣のなさ相な、調子。

「捕つて遣ろかな……」と石橋を渡つて近づいて、にたり〳〵、笑つて居る。

三

暮れ急ぐ秋の野に、風も凪いで、川千鳥の鳴くのが、手に取る様に聴へる。

粂公は立つて耳を澄まして居る。

此所は先刻、校長の娘が兎を探して居た茨の茂みである。粂公の好意は、父なる校長の承引を得て、逃げた兎は粂公の手で、捕はれることに成つたのである。

ものゝ二分も聞き耳を立てゝ居た粂公は突然、身を躍らして、熊笹の根方に手を差し入れた。

やがて、粂公の手には、灰色のかたまりが吊されてある、逃げた兎なのだ。兎は殆んと死んでゝも居る様に、ぴくともしない、きうとも云はない。粂公は又にたりと笑つた。

不意にギヤーと引いて、空を掠めて行つた鳥がある。

[illegible]

兎は無事に戻つて來た。斯くと豫期しなかつた校長は、些か意外と云ふ風で、禮を云つた。ひとり娘のお春も、萬更怒つても居なかつた、それでも、粂公は禮らしい言葉の一つも掛けなかつたので。粂公は氣の抜けた風で校長の宅を辭して來た。自宅に歸へる途中も何だかぶつ〳〵言つて居たのである。

其後村の人達は、粂公の手柄を賞して、豪いと云つて囃し立てた。

粂公は眞にえらい、兎も角も粂公は不思議な能力を備えて居る、一種の通力とでも云ふか、聴覺が非常に鋭敏なのである。

此村は一つの河を控えて居る。さして廣いと云ふのではないが、内海に接した土地だけに、潮のさしひきがある。従つて、さまざまな魚貝が居る。

粂公は、魚を手どりにすることにも亦妙を得て居るので、人の三倍、四倍漁獲のはそう珍らしいことではない。即ち粂公は無職であるが、魚貝を漁るので殆んと職業の様であつた。

五

年は暮れて明けて、はや春である。桃の蕾が色づき初めて、黄鳥の優しいのも雲雀のかまびすしいのも、何となく調和はしい野には、點々畑をしてる人が見え、そより〳〵北風が吹いて、川には小波が立つて居る。

鹿化橋のたもとに、男を背にして、立つて居るのは、お春である。今日は珍らしいことに、髪容を整のへて何だか光る衣服に、牡丹色の帶を大鼓にして、流行後れの洋傘を杖て居る滿足の風が、くつきり白いので、髪容が容色以上に見える、男が何か云ふ度に、ちよい〳〵振むく。

洲に下りて淺蜊を掘つて居た粂公が、不圖此方に目を注けた。すると粂公の瞳が異様に輝き出して、是迄に見たことのない、容貌に成つた。

粂公は其厚ひ唇を、微かに震るはして、女と男とを交るがはる見て居た。

やがて貝のはいつてるざるを其儘に、ふいと自宅に歸つて仕舞つたのである。

。　。　。　。　。

此事のあつた日から、村の名物男、無職の粂公は見えなくなつた。

村人の誰もが其理由を、知らぬ。もとより其行先も分らなかつた。

其日お春と立つて話して居たのは、東京在學中とかで、校長の甥に當る人なので、お春とは其昔からの許婚である。

春も過ぎて、麥の熟する頃に、一夜校長の宅にお目出度があつた。それは十九になる娘と其從兄との、公然の式典であつたのだ。

。　。　。　六。　。　。　。

丁度二百十日の翌日である。昨夜來の大暴風も漸く止み、村の人々はやつと愁の眉を開けて各自、持田の水を切りに出掛た。野中の一軒家は、狂暴な自然に蹂躙されて、見るも無慘に、打ち倒れて、藁葺きの屋根がめげてゐる。

古葛籠や、糸繰車が算を亂して轉がつてゐる。赤ばんだ藁の間に、何だか黒いものがあつて、二三の鳥が羽搏きしながら、下りたり立つたりしてゐるので、村人の一人が近寄つて見ると、殆ど衣服と骨とになつた、男の死體であつた。

（丁）

行方は何處？

小百合[illegible]

昔に醉ふ醉は鮮勇の
「おもひ」の征矢を空を馳り
馳りて落ちてそれも何時か
浮雲さやに影もとめず。

言を吐く息は胸細笛の
無韻の歌と天に流れ
流れて落ちてそれも暫時
やは風そよの音も立てず。

こゝに汝が胸の木霊
雲の消えては見ゆる如く
戀の記憶の朽ちでありぬ。
こゝに汝が胸の虚洞
風のなぎてはさやぐ如く
我が響なほ且つ名殘つたふ。

（ロングフェロー）

○新刊紹介

▲復活（トルストイ著、内田魯庵譯）本書の文壇上に於ける地位價値は世界既に定評あり、譯者本書の解題中に曰く『復活は實にトルストイ翁が一代の心血を傾注したるもの、所謂トルストイズムを寫引に掛けて蒸溜したるエキス也。即ち十九世紀文明を赤裸々にしたる當の一大批評にして政府、宗教、娼妓、裁判、監獄、貴族、刑罰、戰爭等有らゆる現代の問題に觸れざるはなし』『評論之評論』のステツドは極めて肯綮ある評論を加へたり、曰く『復活』はトルストイの有らゆる教訓を包蔵したる破裂彈にして小説は之を包むの外皮也。作者の天才は即ち之を紙中に包るの爆發力にして宛も無數の教訓を八方に散亂したりと』之を日本での最も大家たる魯庵君が譯されたのだから素より申分は無い筈、少しも澁滯する處無く、只著者の意氣呼吸を充分に呑み込んで痒い處に手の届く様な心地快き筆づかひ其れに思ひ切つて俗にくだけて、而もチツトも厭味を感ぜぬ書きぶりは、仲々に常人の及ぶ處で無い。アの單純な筋をアの大部のものに書き成した、そしてチヨト讀過しては左程に面白味も無い著作を、アれ丈け愉快に讀ませて呉れるのは之れ譯者の功績に歸せねばなるまい、裝釘の精麗なる、印刷の鮮明なる、數十枚の精美なる挿繪と共に、出版界以來の大著述と稱するを得るであろう

（日本橋區通三丁目丸善書店發行）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

飢と戀と

司渡涙子

一、女教師

「ほんに『財産は廻り持ち』とかいふが、げに有爲轉變は世の習ひではあるわい――――近頃新らしく聞く○○主義、誠に眞理だ、眞理と知るからは、どうしても之を躰現せねばならん、そうだ、そうだ、昔思へば一村將軍で『飛ぶ鳥も落ちた』といふ家柄、それが度重る不幸に………『昔の何某よりも今の金貸し』なんつて、ほんとに忌ま忌ましい、でも腐つても鯛、女學校に入れて置いて呉れたので、今ぢや、こうして妾一人の口だけは………」

怒濤逆卷く　津輕の海　ごとしき胸に
佇みて　深き思念に　沈む時　梢に烟ぶ
悲し風　憂鬱の身に　音づれて　何れも
全し　秋の暮れ」

彼女は中川清子といつて今石見西部の漁邊に女教員をして居るのである

二、師の愛

「師よ徒らな煩悶は決して救ひを求むる所以の道ではないのです、御覽なさい中學校にまれ高等な學府にまれ「いや學術の奥蘊を究むる場所だ」なんつて口でばかりは……大そう偉らさうに聞えますが、翻つて其結果は如何です？　今日も中央新聞にあつたぢやありませんか、赤門出の學士さんが僅々拾五圓で電車の掌車してゐる………饑餓なくして一日も生存は出來ないのですからな……更に切言すると「金を仇に」悶死するのです、哀れぢやありませんか、孜々として他人の嫁衣を作つてる樣は、畢竟は、飢と、戀と

獨り海邊を　彷徨へば　運命つれなき
若人が　浪のまにまに　血に泣きぬ　郷
よ聞かずや　胃を怪の　絶えず鳴く　食と色「こよ」とぞ招く　師の愛」

彼は槇村登といつて清子の同校の職員で中々剛直で、激越で、そして「論客家だ」との評がある

三、心友

「若し貴郎が槇村さんの位置にお立ちなすつたら中川さんを如何遊ばす？」

「そうです、何も六ケ敷いことはありません、道は只一つですものね、けれど此矛盾の世の中で正しい道を踏まうとすれば必ず多大な迫害と暴壓とに遇ふのです、そこが即ち所謂奇怪な所なのですよ、其辛らさ果ては厭世となり自殺となるのです、彼等は折角世に勝たふと思つて却て自ら敗けるのです、だけれども此簡易な明白な道理の上に立つて「不撓不屈の元氣」只それさへあらば私は信じます、必ず其事業は成功します、ことを、即ち人事を盡して倚は成らない時は慎んで天命を待つ外ないと思ひます」

二人の影を長く長く引きつつ川添ひの小路を喃々とつぶやいで歸る一人の引部は月守、静女といつて中川清子が突然休職になつた後を襲ふて一年餘本校に勤めて居たのが今では自分の町に轉勤して居るのである、一人の洋服男は最早數年來此黒川町に勤務して駒木多助といつて弱者黨の名物男で、そして槇村とは意氣相投た無二の心友である

四、丈なす黒髪

槇村は其受持つ補習科が廢せられたので失職し、怏々として都に上つたが恰も日露の時局で思はしき口もなく果ては北陸の一隅にやつと飯櫃を得て居た、一日槇村は駒木に次の意味な告白をなした

予が最も愛する清子は紋綱る丈なす黒髪の一ト房、髪を短かにムンヅと切つて告げていふ「貴郎よ？足らはぬ妾を見捨てて下さい、心は永劫に盡させぬと所詮添はれぬ縁と知るからは、老い先き短かの君が母親、此上苦しめます事の罪深ければ――――君よ！妾をして御身を貴郎と呼ばしめ給ひし光榮の紀念に今より後わて甲斐なる此髮を………

噫！我れ奈何にせばよき？

駒木は事の茲に至れる仔細を査べた、果然清子は懐妊し脱胎したとのこと、ために所謂「名家の娘に拭ふべからざる傷を附けた」との怒に觸れて其家兄が死を堵して彼女を迫害したからである

五、瀝々たる鮮血

駒木はただ目の當り聞ひ倚は二句左右にして早や既に飢と戀とに泣くに――――怒り心頭に發して激々と○○の罪惡を憤つた「壓迫され壓迫は、やがて物與の氣運を來すもの」一般早駒木は只弱者黨の泣虫ではない、弱者貧者を苦しめ泣かしむる強者富者を挫くべく、起つた「人生成敗、功名欲亦深し」嗚呼慚る静女は渾身の熱血をわかして駒木が事業の一半を敬励すべく心窩かに而も堅く堅く決した、以來彼女は荒涼を好み、激所を慕ふた、従つて身邊の纏綿たる羈絆を脱せん爲めに、一面事業の第一歩に入るべく斷然飛んで紅塵の巷に纏綿な身を投げた。

駒木は色々ふて西國に見聞の事業に失敗して已むなく再戰の準備すべく故國に蟄伏した、其間静女は「久しき因縁の囚徒」として半歳餘常に滴々たる鮮血を流したのである

六、犠牲

清子は爾來、村の娘を集めて裁縫、茶の湯、生花、指南の私塾を起して徐ろに其偉大な思想を鼓吹し次代の母を化育して居る、槇村は四年振り歸省して爲渡駒木が假寓で清子に遇つた、けれど其後、間もなく轉職してからは如何にしけむ、絶えて音信なく早年餘正可清子の戀に負けはすまいに……面も儚に儚に堅き信仰の上に立つ身が……

静女は恩愛の絆絶ち得ず、煩悶の結果家族制度の犠牲として老親を慰安するため學に倚るべく戰宣を布告した。

「君よ！犠牲に生れし身は犠牲に果つべく最早胸中何等の不安なし、而も些の戀愛なく希望なく將た光明なき哀れ此身を憐み給へ妾が犠牲の勤勞を救け給へ」

と噫！されど戀は人生の生命と聞くに……駒木は只「聖き蘆野に咲く白百合を型りの君が濃き香に我れ微笑まむ」と返した計りだ

呼！此兩個の異性が前途や、そも奈何？

七、先決問題

敢て理想といふ勿れ、主義といふ勿れ今の世に何物よりも最も緊急に此奇しき現像は最も大膽に解決すべき者は誰れ？今世紀劈頭の先決問題――飢と戀と――の謎語は正に是れ、社會の全分子が一齋に渇仰して待ちつつある容業の第一頁ならずや、記せ！深く！　諸卿子！

日比谷に鮭壁切りなる時「飢」と「戀」とは爲々樂々として「大」日本帝國を支配しだすを………（完）

田舎の春

西川さつき

田舎の春は實に平和なものである、四季の變化少なき都會では春といつても櫻が咲いて、花見客が徘徊して塵埃が立つまでの事で、寧ろ心ある人をして、此春を世の外に避けたいと希はしむるのであるが、そこは田舎のありがたさ、降りつづく五月雨を簑笠にふせぎ、蛙なく苗代に草苗取り、田植してより、蒼天に熱湯と沸く水田に幾度となく草取りならしうれしき秋の收穫も忙がしさに夜の目も寝ねかねしを、てゝに一年の春と身も心も安らかに樂ふは、まことうらうらと長閑なる春の日長の花さくその時であらう。

自分は久しぶりで故郷の春に遇つた、村は戸數といへば僅五十戸内外、從つて人數も三百とは超へぬ一小村であるが、この里で一ケ月とたゝぬ春の中に家が三軒新築されて、花嫁を向へた家も三軒あつた、北國作の暇な中に家も建て、嫁も取り忙がしくなる用意に備へやうと云ふのである、何にしてもめでたい結構な事ではあるまいか

新築の家の井戸堀も、遠方から頼んだ金掘を持つて來るのであるから三日引つゞけで堀つた、自分はわざわざ見に行つた、手傳の人々は毎日略同様の人々である、壁塗から屋根ふきの手傳も凡ての雜作は主人や家内や村人の手助で出來てしまふ、なる程これでは都會の壁土も遠方から車で運ぶ、繩も竹も買へば職人ばかりで建てるより容易に建てらるゝわけだと思つた。

嫁入のあつた家は、一軒は中以上、一軒は中位で、今一軒は中以下の家であつた、いつとてそこに嫁入と云ふ噂が村中にはると其時刻に皆殘らずの主婦小供、さては男子まで出揃つて見に行く、花嫁御は行々しく謀人、附添に囲まれて來る、嫁さん〳〵と口々に騒ぎたてる、如何に花嫁花婿と云ふもの、、幸多くうれしかるべきものをも人の心に想起せしめる、又花嫁花婿もよし知己友人でなかつたにしてゝて、それがとかしく胸騒ぎして待ち受けた半身であろこと思へば憎からう筈もなく、もの珍らしく、うれしいものであらうと思はれた、わなたち自由戀愛に限るなど、いつて不過の子を作らんよりは此方がはるか人生の幸福かとも思ふたい、それは此漸の血湧溢る異性の人間を並べるのであるもの、且儀式張りなども康納陰嚴の様ではあるか、これも式を嚴にし双方の愛情を一層深からしむる手段として美しきものと思はれた。

中以下の一軒では嫁入仕度の簞笥も御馳走も賀殿が買ひに行けば、御馳走の魚も網引で取り料理もする、嫁御の衣裳を備りる世話もした、これもなかなか進歩して趣味あるとに思つた。

いづれ人間は時世時代の産物だもの、あまり變りものになるより其時其處の風習にならつて滿足し世を樂しむのが、人生の春所謂田舎の平和であらう、然し自ら血出になつて都の塵を吸ふてゐるものもあれば、理想の主張のといつて世に容れられぬ自分等の様な不具者もある、世は様々である何事も運命として置けば議論はないかもしれぬ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

故郷の春

小野有香

一　母より流浪の子に

立ちかへれ立ちかへれ故郷の春に、花も咲き候月も照り候。いつまで浮世の荒き仇浪に昔の夢を貪らむとはする。夢貪る、猶可也。其末だ結びもあへず生身の鱗、浮世の浪にもまれもまれて早や敗殘枯槁のいたましき姿に窶り果てはせずやと、亡き兄の往事のみ偲ばれて夫れのみが老の身の――汝を杖とも柱とも頼み候身の唯一の心懸りにてこそ候へ。

汝が憤然『追放』の一緘を遺して故郷を捨てしより茲に五星霜、流石頑固なりし父上も口にこそ手嚴しき勘當したれ、汝が出て行きてよりの其憐れ憔悴の見る眼もいたはしう、夫れが原因での一昨年の御逝去、老いの身の男心はさても脆く哀しき哉、老母が寂しき懺悔の心を汲み取らば、いつまで拗ねずとも神――世にあらば――も咎めたまふこともなかるまじ。(代筆)

二　母へ

立ちかへれとや母君、いづこに花咲き月照り候ぞや。故郷?故郷!故郷とはそも如何なる意味にて候ふぞや。父母ありての故郷、愛なき父母あるも唯夫れ異郷の客と何の擇ぶ所ぞ。

異郷却つて會心の友あり、世また寂しからむや。況んや我れ既に父たり、我が妻既に母たり、兒は既に二歳の末のいたいけ盛り、『復讐』之れ道義の淵源として教養せられつる兒が日頃の行動は中々の亂暴にて候

我れの心事を知れる人々の間に『この父にしてこの兒あり』その評專らなる由、拗ね者その陰口は素より期する所。真、薄、いかに心強き至りには候はずや、この兒ありて我は永久に生けるものにて候。

母君の寂しさは自ら招きし自得の刑罰、徐ろに味ひ給ひて私が故郷追放せられし當年の心事を推したまひね。願くは復歡樂今酣なる我が一家團欒の興をな醒まし給ひそ。

三　再び母より

絶えて久しき御文なつかしく披見いたし候、唯々御許達一家が息災との消息を得ていかばかり安堵の胸なでおろし、嬉し泣きに泣き申し候ひしよ。

さても強い僻り、さらく無理とは存せず、母が寂しさは『自ら招きし自得の刑罰』なる事は千萬承知覺悟致し居り候、母が心なき業より『いつまで拗ねずとも神のお咎めはあるまじ』と申送り候一言、復もや御氣に觸れ候容子、老いの愚痴よりとは申せ苛に心なの業にて候ひね、何卒宥したまはれ。

此度こそ何等かの消息もやあらむかと、それのみ朝夕諦めの際の祈願にてそ候ふなれ、あゝ有り難し忝し、神や佛は世に在しき、祈願を聽き容れたまひてき。

さるにしても、などて人の心のみさは剛良なる。御身が彼女を迎へむとしたるを拒みたるは誰?、肉親の父が臨終の願ひを空吹く風と聽き流したるは誰?、今また唯一人の――世に頼りなき孤獨老衰の――母が懺悔の哀願に耳を掩はむとするは誰?。

嗟、世はかくて意餘手に登壊滅に陷らむとするものに候はずや。

老いては愚痴を生命の人の身の上、あはれはかなき限りながら、さて言はで巳むべきに候はねば、一通りはお聽き下さるべく只管念じ上げ候。

何よりも先づ申上げたき一事は『過去をして過去を葬らしめよ』の一言にて候。流るゝ水は清濁を併せ容れてやがて其自然の清澄に歸り候。清澄は水の眞の姿とは申せ之れ『時』の力にて候慈悲にて候。過去の汚濁の姿の洗ひ清められたるは、現在の清きを旨と念じたる水の努力渇仰の結果にて候人間世界のあらゆる罪障の、其心よりの『悔改』によりて消滅し、直に淨界に救はるとの系き一事は、御許が日頃渇仰すといふなるキリスト樣も敎へられ候やに聞き及び母の生命のお釋迦樣も仰せられ候。さる聖賢の方々の御心はいと畏し。

て、に手近なる一例は村の田五作の倅畑造殿の身の上にて候。御承知の通り近村からけての放蕩三昧の無賴漢にて候ひしが、不圖の發心より今は着實堅氣の男となり、正直正作の稱もしき名を附けられ居り候。此男が村のため他人の爲といへば自分の生命を棒に振つての盡力、皆々その義侠に信賴致し居り候。今では誰一人として畑造殿の舊惡を言ふものも無之、定に羨ましき限りにて候、この事を見聞する度に、御許の上のみ偲ばれて唯々涙の乾る間さへ無之、殊に軒傾き柱歪むやうに相成候ては、自づと人足の遠ざかり、今では老衰のこの身を心より慰め呉るゝものとては、隣村に嫁げる御許の姉のみにて候。實に心も滅入るばかりのこの頃の寂しさにて候。最早餘命いくばくもなしと覺悟すればする程御許のみ戀しく、剩へ此頃にては眼も霞み聲も嗄れて刻々死の黒き手に攫はれ候やう感せらるゝを、願くはまだ眼の明るきうちに一目、唯一と目御許の男らしき姿、父としての容子を見まほしう、孫も嫁もいかばかり此身を恨みやしぬらむと思へば思ふ程、存命のうちに詫言もして置きたし、さもなくては冥途の旅の浮ぶ瀬もなき地獄に陷らむも空怖ろしく、努々家内連れにて一度歸省してたまはらずや。母の『老』てふ一事に免じて何卒心やわらげてお聽き容れ下され度只管念じ上げ候。

申上げたきことは濱の眞砂の數あれど、この一事書き綴るだにみだれがちなる水莖のあとや先きなる愚痴の葉。畏き神佛の若しも許し給はゞ罪は八百もじの上とこそ『願くは復、歡樂今酣なる我が一家團欒の興を醒ますな』このお叱りをも顧みず殊に母が御許達が歡樂の興を醒すに至りたる罪を深く深くお詫びいたし候、かしこ。

四　再び母へ――悔改

慈母樣、私は何といふ剛腹な拗ね者でしたらう、今の今まであなたや亡父君を心よりお恨み致して居りました、何といふ不孝者でしたらう大罪人でしたらう。そゝろ我が心の怖ろしく、我兒の行末の痛ましさに戰慄いたしました。何卒、何卒お母樣、今までの罪をお赦し下さいませ。

あゝ惡かつたと悟つた今は、せめて萬一の罪滅ぼしに早速歸省お詫びいたす筈ですけれど、公務といふ世の義理に縛られた今の身の上、唯悔改の眞情のみを一と足先立たせましたから御安心の上お迎へ下さいまし、こゝ一週間のうちに歳末事務を處理いたし、早速家族一同歸省の上久しぶりにて樂しきお正月を迎へませう、御待ち下さいまし。

さるにしても現在我が楽みの親に對して『母君の寂しさは自ら招きし自得の刑罰、徐ろに味ひ給へ』てふ殘忍酷薄の暴言を吐きし私の心こそ鬼とも魔とも申しがたい非道いかなる方法を以てしても之を償ふの道はありませぬ。世界廣しと雖私にまさる不孝非道の人非人はありますまい。嗚又吁。

今までは私の上に活きた神樣は居ませんでした。悔改めた今の身には神樣があるにしても心の汚れの恐ろしさに、神樣に面とむかつてお詫びするの勇氣がありません。けれど今は逃げれば逃げる程何だか知れない大きな手に追及せらるゝ樣な重い氣が致してなりません。どうすればこの苦しい心が治まるでせう!?

慈母樣、あなたの嫁は――自分の妻を自慢する樣ですが――實に見上げた者です。何れ不日お目に懸つた上で委細萬事申上げますが、今日までに幾たびか私にせがんで不孝のお詫び旁々御機嫌伺ひに歸省しよう歸省しようと言ひ出たか知れません。だ。が、いつも私は頭から叱りつけて取り合ひませんでした。でも妻は何か美味しい食物や、暖かさうな衣類を見るたんびに、『これをお母樣に上げる事が出來たなら』といはない事がありませんでした。之れが常に私たち兩人の間の爭ひでした。けれど私も女です、強つてとは言ひ得ませんので私はいつも勝ち誇つて頭から叱りつけて居たのでした。

だが一つ女の力の強いのに感心してる事があります。頑是ない孩兒に對つて私が一生懸命に、人間の殘忍性な『復讐』の神を祀るべき宮殿を築かうとすると、妻はすぐに後から後から之を破壞し始める、破壞は兒供といふものゝ全體であります上に、優しい女の力がいかに兒供の上に感化を及ぼしたでせう。『復讐』か、あらず。謙遜か、あらず。孩兒は日に日に亂暴となり強情となり、母には懷くが私には餘り懷きません。

でも今の今でもこの強情亂暴こそ私の生命たる『復讐』の力そのものであるとして喜んで居たのでした。あゝ悔いて及ばない事ながら、孩兒の行末が怖ろしうなりました。『子を以て知る親の恩』あゝ凡て之れでした。

どうすればこの罪の心の苦惱が除かれませうか。唯々拜眉の上いかやうにもお詫びは致しますが……。(以下十一面)

(以下十一面)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

慈母様、あなたの嫁からも孫からも「お祖母様に宜敷」との傳言です。
こゝ數日間は殊に御身御大切にとお祈りいたして居ります、さようなら。

五　三たび母より

凡てが神佛の御加護、感泣しつゝ一日も早いことを祈つて居ります。
孫の顔がどんなに能くお許に似て居るでせうな。
これで十年も壽命が延びた氣がします、どれ〳〵腰も伸ばして置きませう。

○　○　○

六

顧れば世の荒浪にもまるゝこと茲に五星霜、世は又もや立ちかへる初春に、いづこを見ても屠蘇の機嫌のさゞめき、華々しき車馬の絡繹こそなけれ、こゝ片山里なる故郷の春、三日見ぬ間の櫻なるに、こは之れ五つとせの長き春を隔て、慈母の御髪のいや白く、眼高顴に窪み、黒眞珠なせし齒は悉く拔け、小さく縮みし顔面の皺たらけなるに、曲れる腰の折れもやせむと疑はるゝ御有様、一瞥愕然たりしが、見馴るれば其嚴しき面の何處やらに微笑の影の仄めくを覺えぬ。

かくても世は春なりき、村人こゝろあまり訪れ來ぬ、山河丘壑もその儘にして、亭鶴の丘の一つ松は籟流る、桑梓川の瀬音に合せてとこしへに颯々の春の曲を奏す。

從前の友は或は他郷に、或は冥途に、甲去り乙逝きて殘るべき友は寥々たり、村の父老今猶輕蔑の眼を以て冷かに迎ふ、この不遇の中にありて我が母獨り孤軍苦鬪をつづけ、只管その不幸なる豚兒の成功と悔改とを祈り給ひし御心の雄々しさ尊げなさ！　何を以てこの高恩に報い奉らむ。

縱し我も男子、成すべきの腕あり！！

七

一日俄然として悟る所あり。

世に「孝道」を說く者あり、敎ふる者あり否強うるものあり　凡て非、孝道は人情自然の機微に發する本能也、敎ふべからず、說くべからず、強ゆべからず。唯人情の極美より出づる愛情の存否に因す。これなくして說くは愚、況んや強うるに於てをや。燒野の雉子、夜の鶴、いづれか子を思はざらむ。親にこの至情至愛ありてこそ敎へざるに子は孝道を完うすなれ。

我れ神に憧れ、神に迷ひたること茲に幾年、我が心の迷ひの故にやありけむ嘗て我が見し花は霞につゝまれてありき、我が仰ぎし月は朧ろなりき。今俄然として悟る所あり、顧れば我が信仰や凡て虛僞、社を拜んで神となし居たりき。僞善に陷らざらむとするも能はず。予は專ろ僞善に苦しみつゝ僞善の道を辿り來りぬ。

さはれ今圖らずも人情の極美を基礎とせる眞の神に面接し得たりき。永劫に花は紅柳は綠！。我が至幸至福如何ばかりぞや。

こゝに三歳の春を迎へし愛兒を抱きながら懺悔と感謝との已みがたき祈禱を綴る。

俗事多端、年末年始の禮を欠く

福田英

貧乏暇無し、年賀の禮を欠く

石川三四郎

純良牛乳店

新聞雜誌縱覽御隨意

▲面白き小說類澤山あります。

神田區仲猿樂町二十番地

豊生軒

▲趣味ある讀物多くあります。

官報書籍縱覽御隨意

一月十五日發行配布用

平民の友　一

くらしを樂にする法

讀め！見よ！情けある諸君、飢えたる諸君、本書を讀まざるものは人にして人に非ず

一部郵税共三錢十部仝拾錢五十部仝廿五錢百部仝四十錢○往復はがきにて至急御申込あれ代金は冊子受取後に送りても苦からず

申込所

埼玉縣北足立郡片柳村字東新井

白倉甲子造宛

●歐米諸國最新流行　禮服用時計

天賞堂特別注文新品

●純白金側（梨地）……價參百參拾圓
●純白金側（梨地）……價參百五拾圓
●拾四金側（無地）……價參拾五圓
●拾四金側（斜子）……價五拾八圓
●拾四金側（彫刻又は梨地）價六拾圓
●拾八金側（無地）價四拾五圓
●拾八金側（無地）……價七拾圓
●拾八金側（彫刻又は梨地）價七拾貳圓
●拾八金側（梨地）……價百廿五圓
●拾八金側（無地梨地又は斜子）價貳百五圓
●金着側（無地梨地又は斜子）價廿四圓
●銀側（無地）：價拾貳圓
●銀側（梨地）……價拾貳圓七拾五錢
●銀側（斜子）……價拾參圓
●銀側（斜子）……價拾四圓
●銀側（梨地）……價廿壹圓半

以上・盤面文字羅馬數字亞剌比亞數字共同價の事

●市外送料金十二錢　振替貯金口座五九六六

東京市京橋區尾張町二丁目

時計寶玉類内外雜貨貴金屬美術品商　天賞堂

電話新橋　特三三三　特三一五三

電話（東七三三）天賞堂大阪出張所
電話（本二六〇）天賞堂神田出張所
電話（八七六）天賞堂横濱出張所
電話（二二九）天賞堂長崎出張所

最も賢明なる經濟家の必ず使用すべき新式安全剃刀

此新式自働研ぎ安全剃刀の發明せられたる時猶は斬髮所に行き或は舊式剃刀を用ゆるは電車に乘らずして無用の時間を徒費するが如し

新式自働研ぎ安全剃刀ある今日、諸君は最早理髮床に行くを要せず、衛生的にも時間的にも二つながら便利也。シカモ最安全にして剃刀の經驗全く無き諸君も些の危險なく容易に使用し得て如何に濃き鬚なりとも僅四五分間にスベ〳〵と剃るを得べし。剃刀を使用するには必ず革砥を要す。シカモ革砥は高價なる上に其使用に熟練を要すれば剃刀使用者は常に革砥に難困す此剃刀には革砥を附屬し、且其裝置たるや頗る簡便にして剃刀の刄を外さずして其儘に即時研ぐを得。如何なる素人も從來最困難なりし剃刀研ぎに何等の熟練を要せざる也。附屬の換刄は十二枚にして一個は大凡二三十回の使用に耐ゆるに十分なれば經濟上より見るも頗る低廉也。且若し此十二枚を使用し盡す時は更に換刄のみを供給するが故に我が和製剃刀の安價なるに比べて少しく高きが如けれども實は永久的なるが故に斬髮店に行くよりも遙に低廉也

（換刄十二個及革砥付美麗革函入金十圓郵税十二錢）

日本橋通三丁目

丸善洋物店

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

樋口龍峽著

新刊

社會主義と國家

社會學專攻文學士

眞の社會主義は善良なる社會組織を理想とす其目的現時の社會的欠陥を救ふに在り而も近時社會主義を唱導するもの動もすれば奇矯過激に亘り徒らに世を騷がし世の誤解を招く痛嘆に耐ゆべけんや本書之に慨し此主義の爲に妄を辨し惑を解く一社會問題に着眼する人士の一讀を望む

定價拾五錢　郵稅貳錢

發行所　本鄉湯島天神町　日高有倫堂

祝世界婦人創立三週年

東京神田錦町三丁目

東京　瓦斯株式會社

齒科治療　自午前八時至午後十時

吉瀨齒科醫院

院主　吉瀨才市郞

東京市神田須田町二十六番地（萬世橋內右横町）

●藥價手術料共半額
●貧困者施療

涙紅醫院主院長

醫士　一瀨鷹一

一院　日本橋區蠣殼町二丁目十四番地
二院　神田區連雀町十八番地

學生勞働者薄給者諸氏には藥價手術料共半減又無料に

田山花袋著

小說

生

過去數年間に於ける自然主義運動の結晶して現れたるものは本書なり柏亭白穗棠明邦助三畫の挿畫又珍とするに足る

定價九拾五錢　郵稅金八錢

東京麴町區飯田町

易風社

振替一二〇三四番

木下尙江

新作小說

墓場

正價卅五錢　送料六錢

人は皆な自ら死して新たに生まる〻ことを要す『墓場』出でぬ『墓場』は明治歷史の批判也、新機運の母胎也

發行　東京本鄉弓町　昭文堂　振替七六七四

畫報

グラヒック

初號元日發行　四六倍四十頁　定價六錢　郵稅壹錢　十部拾二錢八

時代は斯くの如き文明的美術畫報を產出せり

要目
元旦　各顯官の參朝●新春光景清國碑柱
議會式開院●南洋爪哇風俗●既成と未成建築物
日本銀行主腦と執務●岡澤大將恩賜の御品●數
澁澤男の一日　は終日寫眞部員が隨從して朝は起床洗面より諸會社を歷訪し知名の實業家と會見せられたる等特殊逸品の寫眞
萬龍の艷姿　特撮寫眞廿種是藝妓
演藝　には本鄉座の相夫恋新富座の米國奇術師の手錠●倖ぢ切り
寫眞日記　は十二月の事故大小を促へて寫眞とし年末光景は前年の名殘を留め其他の細目擧げて數へ難し

天下斯の如く至美至廉のものありや

東京丸ノ內　有樂社　振替三六三〇

◎定價▲一部六錢●十部五十五錢●二十部壹圓▲申込は總て前金の事
發行兼編輯人　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地　石川三四郎
印刷人　東京市牛込區赤城下町五六番地　井口正之
發行所　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地　世界婦人社
印刷所　東京市神田區[illegible]　博眞堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY